他者経験の基礎としての「覆い合い」

“Overlaying” as the basis for the experience of others

田中奏夕

Kanata TANAKA

要旨

本稿では、従来の主要なフッサール解釈とは異なり、感情移入論に登場する「覆い合い (das Überdecken)」という概念が他者経験の基礎となりうるものであることを提示するとともに、感情移入論が他者を自己に対する「同質性」と「異質性」の二側面を持ったものとして導出していることを明らかにする。そのために本稿では、感情移入論での「触覚 (Tastsinn)」の意義を強調した Z・ルオの研究を手がかりにしつつ、その制限を解消する方策として発生的現象学に注目する。本稿は、以下の構成をとる。まず、感情移入論の要諦としての身体的類似性の成立に対する従来の批判を取り上げる (1)。次に、この批判へ応答するために、触覚をめぐるルオの解釈を参照し、さらに本稿の立場から彼の解釈の制限を指摘する (2)。最後に、この制限を克服するために『デカルト的省察』『第五省察』及び『受動的綜合の分析』の議論へ立ち戻り、超越論的次元で記述された「覆い合い」が、二重感覚による他者経験の成立根拠となっていることを明らかにする (3)。

Abstract

In this paper, we propose that the concept of “overlying (das Überdecken),” which appears in empathy theory, can be the basis of the experience of the other, in contrast to the traditional interpretation, and also show that empathy theory derives the other as having two aspects, “homogeneity” and “heterogeneity” toward the self. To this end, this paper takes a cue from the work of Z. Luo, who emphasized the significance of “sense of touch (Tastsinn)” in empathy theory, and focuses on genetic phenomenology as a means of resolving its limitations. This paper is structured as follows. First, we will address the conventional criticism of the establishment of physical similarity as a key element of empathy theory (1). Next, in order to respond to this criticism, we refer to Luo’s interpretation of tactile sensation and point out the limitations of his interpretation from the standpoint of this paper (2). Finally, in order to overcome this limitation, I will return to the discussion of *Cartesian Meditations* “Fifth Meditation” and *Analysis of Passive Synthesis* to show that the “overlying” described in the transcendental dimension is the basis for the establishment of the experience of the other through

double sensation (3).

はじめに

本稿の目的は、E・フッサールの感情移入論に登場する「覆い合い (Überdecken)」という概念を、他者経験の基礎となる事態として明らかにすることにある。この解明を通じて、感情移入論が他者を自己に対する「同質性 (Homogenität)」と「異質性 (Heterogenität)」の二側面をもつものとして導出していることが示せるであろう。

フッサールは、後期の主著『デカルト的省察』(以下『省察』)の「第五省察」で「いかにして私のエゴは [...] 〈他者経験 (Fremderfahrung)〉という標題のもとに、まさに異他なるもの (Fremdes) を構成することができるのか」という問いに答えようとしている (I, 126)¹。感情移入論と呼ばれるこの試みによれば、他者が固有領域 (Eigenheitssphäre) における自己の身体との類似によって構成される。その際に「覆い合い」は、二つの所与が受動的に結びつけられる「対化 (Paarung)」作用として、表立っては自我による他我の超越論的構成の一契機とみなされた。

しかし、自我に依拠するこの他者構成は、後に多くの批判を呼んだ。例えば A・シュッツは、自己と他者の身体の現出が異なるという点に注目し、そもそも感情移入の出発点となる身体間の類似性が成立し得ないと批判する (cf. Schutz 1975)²。さらに、M・トイニッセンは、身体的類似性に基づく他者構成があくまでも自我からの一方的な投影に過ぎないと処断する (cf. Theunissen 1977)。

それに対して本稿では、Z・ルオによる近年の研究を手がかりにし、上述の批判に抗して身体的類似性が成立するための根拠を明らかにする。ルオは、主に『イデーニII』の身体論で注目された「触覚 (Tastsinn)」を手がかりに、「二重感覚 (Doppelempfindung)」を通じた自己と他者の相互関係を明らかにしようとする (cf. Luo 2017)。本論で明らかにする通り、こうした彼の解釈は、「握手」のような触覚的経験を強調することによって、上述の主要な批判を退けながら、自他の身体が「物的身体 (Körper)」と「生きる身体 (Leib)」という二側面をもつものとして類似可能であることを提示しているのである³。

---

¹ フッサールからの引用文は、慣例に従い *Husserliana* の巻数をローマ数字、ページ数をアラビア数字で表わす。

² なお本来シュッツの表記は *Schütz* だが、本稿では参照する文献の関係で英語表記の *Schutz* を使用する。

³ *Körper* と *Leib* の訳語に関しては、両者とも「身体」とひとくくりに訳すことができる。しかし、フッサールは、これらの語を区別して使用している。*Körper* は、客観的に存在する「物体」としての身体という意味合いが強い。それに対して、*Leib* は、もともと *Leben* から派生した語であり、フッサールはこれをキネステーズ感覚と結びつけて主観がまさに生きる身体という意味合いで使用している。本稿では、*Körper* を「物的身体」、*Leib* を「生きる身体」と訳す。

とはいえ、本稿の見解では、ルオによる以上の有益な解釈にも制限がある。それは、彼が重視する握手の例に顕著なように、すでに成立している他者との交流という自然的な次元での感情移入について論じるにとどまり、その他者が〈そもそも他者としていかにして経験されるのか〉という超越論的な問題に立ち入らなかったという制限である。この制限を乗り越えるために本稿では、「覆い合い」に着目してフッサールの提示した対化現象の意義を再検討する。予め結論を簡潔に述べておくと、「覆い合い」は、ルオが示した触覚的経験での自他の身体構成を成立させる根拠であり、「覆い合い」によって他者が自己に対する同質性と異質性の二側面をもったものとして経験可能となる。

本稿では次の手順をとる。まず、感情移入論の要諦としての身体的類似性の成立に対する批判を取り上げる(1)。次に、この批判へ応答するために、触覚をめぐるルオの解釈を参照し、さらに本稿の立場から彼の解釈の制限を指摘する(2)、最後に、この制限を克服するために「第五省察」及び『受動的綜合の分析』の議論へ立ち戻り、超越論的次元で記述された「覆い合い」が、二重感覚による他者経験の成立根拠となっていることを明らかにする(3)。

1 感情移入論に対する主要な批判

本節では、感情移入論の要諦である身体的類似性に対する主要な批判を検討する。そのためにまず、感情移入論の要点、および身体的類似性の位置づけを簡潔に押さえておこう⁴。

周知のように、フッサールは、自らの超越論的現象学を「自我論 (Egologie)」と規定した。彼は、世界に対する「一般定立 (Generalthesis)」を括弧に入れ、その素朴な定立をエポケーすることによって、あらゆるものを意識体験へと還元する。そして還元の結果、意識体験の収斂する「超越論的自我」が明らかになるのであった。しかし、フッサール自身が認めている通り、世界に対する一般定立には他者の存在も含まれている。そうであるならば、普段素朴に信じられている世界内での他者との共存が括弧に入れられることによって、現象学は、もっぱら他者を自我によって構築されたものとみなす「独我論 (Solipsismus)」となってしまうのではないか。フッサール自身、このような重大な問題を自覚していたのである。この問題を克服するために、彼は、自我への還元がもたらすように見える独我論が、実は哲学的には低次の段階であり、それが一貫して遂行されると高次の「間主観性論」へ至ると考えた (I, 69)。「第五省察」が「独我論という批判に応答する」という趣旨で始められながら、あえて独我論的な自我論で他者を構成するという道筋が取られたのも、本来は最終的に間主観性の次元へ至るためである。

---

⁴ フッサールが展開した感情移入論は、主に『イデーニII』や1920年代の草稿で行われた自然的態度での人間という経験的エゴに関するものと、『省察』『第五省察』や1930年代の草稿で主に取り組まれた他我を解明するための超越論的な議論に区別することができる (cf. Kozlowski 1991: 93)。

それでは、その他者構成論は、具体的にどのような仕方で展開されるのであろうか。フッサールは『省察』で、他者に関わる考察を感情移入論として論じている。彼によれば、まず他者を予め前提しないために「抽象的エポケー (die abstraktive ἐποχή)」が行われる (I, 126)。このエポケーによってあらわになるのは、自己の固有領域であり、ここには自己の「体験流の顕在性と潜在性」、「構成に関する体系や構成された統一体」が含まれている (I, 134)。すなわち、固有領域への還元は、他者を前提とするあらゆる態度を括弧に入れ、完全に自己のみ由来する経験の領域をあらわにする操作である。そして、この固有領域で自己の身体と他者の身体との間に類似性が認められることを手がかりに、自他の身体が「対」を形成し(対化)、自己と同様に自我を備えた他者が構成されるわけである⁵。

以上が他者構成論の要点である。他者構成論に対する従来の主要な批判は、この要点をめぐってなされてきたと言ってよい。そこで以下では、この批判を明確な形で提示するために、身体的類似性への二つの批判を検討する。

第一の批判は、シュッツや A・D・スミスに代表されるものである。以下ではこの批判を「物体性批判」と呼ぼう。この批判は、自他の身体が完全に同じ仕方では現出しない点に向けられている。シュッツによれば、「他の身体は視覚的に知覚されるが、私の身体は一般には私によって視覚的には知覚」されず、「たとえ視覚的に知覚されとしても、部分的に知覚される」(Schutz 1975: 63; cf. Smith 2001: 223)。すなわち、自己にとって、他者の身体は、時間をかけてそれを視覚的に知覚することによって、その全体が充実可能であるのに対して、自己自身の身体の場合は、自らの身体を見ている「眼」や「背後」が常に存在し、決して完全な充実に到らない。つまり、自己の身体と他者の身体は、物体として現出する仕方が重要な点で異なるのであり、それゆえ両者の間に類似性が成立することはできない。

第二の批判は、R・コズロフスキーに代表されるものである。以下ではこの批判を「身体性批判」と呼ぼう。身体性批判によれば、フッサールの身体的類似性の説明は、他者が物体的身体として与えられることを出発点としているために、その身体が同時に生きる身体でもあることを証明することが要求される。だが、この証明は困難である。というのも、他者の心的な側面は、決して直接的に捉えることができないものであり、コズロフスキーによる

---

⁵ なお K・ヘルトは、感情移入論を次のような四つの段階にまとめている。①まず、私の固有領域に何らかの物体が現れ、それが私自身の物的身体と類似するものとして把握される(対化)。②次に、私は、自らの身体が物体性 (Körperlichkeit) と身体性 (Leiblichkeit) の統一体であることを把握する。③さらに、私は、身体はこの統一性という意味を私の物的身体と類似した他の物体に移入すると同時に、「私がそこにいるかのように (wenn wie ich dort wäre)」という意識を獲得する。④最後に、「私がそこにいるかのように」という意識は、私の身体と同様に「絶対的ここ (das absolute Hier)」として機能している他者を統覚することを動機づける (cf. Held 1972: 33f)。本稿で検討する批判は、より厳密にみれば①に相当する。ただし、本稿の見解では、残る②③④を正確に考察するためには、①の段階への批判に応答しなければならない。それゆえ、本稿では、①の議論を集中的に扱う。

と、身体的な類似がもつばら物的身体の間での事態に限定されるならば「〔他者の〕物的身体において、心的なものの層へ感情移入することが不可能になる」からである (Kozlowski 1991: 112)。それゆえ、他者がたんに物体として与えられていることを出発点とするならば、身体的類似性を要とする感情移入論は、他者の生きる身体の与えられ方を積極的に説明できないことになる。つまり、他者の物的現出から出発することで、その背後に存在すると考えられる心的な側面に到達することが困難になってしまうのである。

さて、これらの批判は、いずれも自己に対して他者が物的に与えられるという前提に立っているように思われる。すなわち、物体性批判では、自他の身体の物的な現出の差異が批判されている。また、身体性批判では、他者がたんに物体としてのみ与えられることを出発点としているために、他者の物体に存在すると考えられる心的なものへと至ることができないという批判が展開される。

以上の重大な二つの批判に対して、他者がたんに物体としてのみならず、生きる身体としても経験可能であることを示すことで応答を試みたのがルオである。そこで次節では、ルオの解釈を考察する。

2 ルオの解釈の検討—触覚的経験への着目—

ルオの解釈の要点は、ひとことで述べれば、身体構成における「触覚」の意義に注目することである。すなわち、彼によると、自己がいかにして他者を生きる身体としても経験可能であるかを示すには、身体構成において触覚が果たす特権的な役割に注目する必要がある。

実際ルオが強調するように、フッサー自身が『イデーニⅡ』で、触覚による身体構成に「二重感覚」という特別な働きを見出している。その際にフッサーは、「右手が左手に触れる」という経験によって二重感覚を説明している。彼によれば、右手が左手に触れるとき、右手に物体（左手）の感覚が局在化して得られるとともに、右手の内的なキネステーズ感覚を得ることができる。しかし、ここで重要なのは、右手に触れられているという感覚が左手にも生じているということである。この触れられているという感覚は、左手が物体であることを規定する諸性質を構成するものではない。すなわち、触れられた左手は、たんなる物体ではなく、感覚する身体として捉えられるのである。それゆえ、右手が左手に触れる際には、両者が「感覚態 (Empfindnis)」をもつということが重要であり、右手と左手によるこのような二重の感覚を獲得することによって、一つの身体が統一的に構成されるのである。

重要なのは、以上の経験が触覚に特有なものであり、視覚では決して起こり得ないという点である。というのも、「私は自らに触れるのと同じような仕方で、自らを、自分の身体を見ることはない。なぜなら、触れられる身体としての私の身体は、触れられながら触れるものでもあるが、見られている身体と私が呼ぶものは、見られつつ見ているものではない」からである (IV, 148)。すなわち、視覚は、見ている器官（目）を直接的に捉えることができないゆえに、自らの見られている身体（例えば自分の手）が物的であると理解できても、

それが同時に見ている身体でもあると統一的に理解できない。換言すると、視覚は、見ているものと見られているもの間に絶対的な乖離を生じさせる。それに対して、触覚は、触れているものと触れられているものが相互に転換可能であるがゆえに、両者が同じ身体の二側面であるとの理解を可能にする。

ルオはフッサールによる以上の記述に注目し、身体的類似性への批判が視覚的経験の強調に基づいていると指摘する。ルオによると「触れられたものと未分化」になるような触覚的経験とは異なり、視覚的経験では、見るものと見られるものの乖離が生じ「他者がたんに一面的に知覚」されるのみである (Luo 2017: 51; 57)。すなわち、視覚的経験で他者を捉えることによって、他者が一面的にたんに物体としてのみ捉えられるという誤解が生じる。そして、すでに示したように、物体性批判と身体性批判は、他者がたんに物的身体としてのみ捉えられることを前提としている。

それでは、ルオが強調する触覚的経験は、他者理解にとっていかなる意義を有するのだろうか。ルオは、「握手」という具体的な経験の考察を通じてこの問いへ踏み込んでいる。彼によれば、まず握手は、上述のような、自己の身体構成の際に生じる自己自身の手に触れる経験と異なり、自己内部的な二重感覚は生じない。しかし、他者と手を交わす際に、自己は、自らの身体構成の時とは異なった二重感覚を得ることができる。すなわち、自己が他者の手を掴む時、自己は他者の手の物的な感覚と共に、自己の手が他者によって掴まれているという感覚を得ることができる。この掴まれているという感覚は、決して「自分から引き出すことも自己へと還元すること」もできない感覚であり、それによって自己は、他者によって働きかけられていることを理解する (Luo 2017: 57)。ルオは、この働きかけを捉えることが他者の生きる身体の経験であると解釈して次のように言う。「他者の真に生きられた側面は、自己が他者に掴まれている存在であるという仕方で、触覚によって与えられる」(Luo 2017: 57)。このように他者との握手によって、自己は、他者の身体がたんに物的身体だけを備えているのではなく、生きる身体も備えていると理解することができる。以上の理解に基づくならば、自己の身体と他者の身体は、自己と他者が交わることによってしか生じない相互的な二重感覚を通じて類似可能となる。すなわち、自己は、自らの身体構成に際した二重感覚（自己の物的身体と生きる身体の現出）と共に、他者に触れることによる二重感覚（他者の物的身体と生きる身体の現出）も獲得することができる。

ルオは、以上のような新たな解釈によって、身体的類似性の成立に対する従来の主要な批判へ応答している。換言すると、ルオの解釈がもたらした二重感覚への注目によって、他者をめぐる現象学的分析が視覚を中心とした一面的な他者経験から、触覚による統一的な他者経験へと移行することができる。これによって、視覚が生み出す絶対的な乖離に由来する自我中心的な他者構成から、他者の他者性を捉える道が開かれたと言えるであろう。

しかし以上のような、ルオの解釈には、重要な問題点がある。たしかにルオの解釈は、これまで看過されてきた触覚という概念を感情移入論へ持ち込んだ革新的なものであり、自然的態度の世界において、具体的な人間の間で相互に行われる握手という事態から自己と

他者の関係まで考察を導いたのであった。だが、物体性批判と身体性批判は、より厳密に見れば、「第五省察」での固有領域における身体的類似性の成立へ向けられている。そうである以上、これらの批判への応答もまた固有領域での議論に限定した形でなされなければならないであろう。さらにいえば、ルオの解釈は、固有領域を出発点とした超越論的な議論で補われて初めて、意義がある。つまり、ルオが明らかにしていない、二重感覚によって自己に与えられる他者身体の感覚がいかにして他者の経験となるのかを固有領域において考察しなければならない⁶。

したがって、握手、およびそれが行われる自然的態度の世界そのものは、そもそも「第五省察」にしたがうならば、他者が〈自己にとっていかにして経験されるのか〉という固有領域でなされる問いを解決した後でその正当性が得られるはずである。そこで次節では、「第五省察」での固有領域を出発点とする議論へ立ち戻り、本稿の立場からルオの解釈の制限を克服するよう試みる。

3 覆い合いによる自他のせめぎあい—二重感覚の成立根拠を手がかりに—

本節では、ルオの解釈でその意義が示された二重感覚の成立根拠を「第五省察」と『受動的綜合の分析』での議論に照らして検討する。その際、本稿では、「覆い合い」という受動的な働きに注目する。

本節の課題に取り組むために、ここでは、ルオの解釈の意義を次のように再解釈したい。すなわち、ルオの解釈での他者経験の本質は、自己と他者の「せめぎあい」にある。なぜならば、ルオの解釈によって、自己が他者を生きる身体として経験する契機が与えられるということは、換言すると、他者が自己を物的身体として規定しようとする事態が考察されているということになるからである。例えば、自己が他者の手を掴む時、自己は他者の手の物的側面を捉えるのと同時に、他者の生きる身体としての手に掴まれることによって自らが他者の物体となっていることを理解する。それゆえ、触覚的経験での他者経験は、自己が他者を規定しようとする働きと他者が自己を規定しようとする働きの「せめぎあい」として解釈できる。

それでは、この「せめぎあい」は、固有領域ではいかなる現象として記述されているのだろうか。本稿では、この現象が「覆い合い」であると考えてみたい。なぜなら、この覆い合いは、受動的に対を形成するものの中で、一方のものが他方のものの意味によって規定されるという「相互に押しかぶせる覆い合い (das wechselseitige, überschiebende Sich-Überdecken)」

---

⁶ ルオが展開した議論は、「第五省察」での超越論的な議論にあえて言及しないという形式を採っているように思われる。このルオの試みは、後にフッサールの身体論から影響を受け、独自の議論を展開したメルロ＝ポンティとの関係を考える上でも非常に有益なものである。しかし、本稿でこの議論をこれ以上展開することはできないため、今後の課題としたい。

として記述されているからである (I, 143)。また『受動的綜合の分析』では、覆い合いが類似するもの同士の「綜合的合一 (die synthetische Deckung)」と「綜合的抗争 (der synthetische Widerstreit)」として記述されている。それによれば、類似するものの間では、両者が同じものであるとする「綜合的合一」と、一方のものの意味 (A) が他方のものの意味 (B) を覆い、覆われたもの (B) が露呈されることを求めることによって、一方のもの (A) を覆い返す「綜合的抗争」が生じている (XI, 130)。例えば、「赤い三角形」と「青い三角形」が存在する場面を考えてみよう (cf. XI, 130)。この二つの三角形を重ね合わせる場合、「三角形」という図形が類似したものとして捉えられる (=綜合的合一) と同時に、「赤」と「青」という意味が相互に押しつぶせられることで、どちらか一方のみが際立って捉えられる (=綜合的抗争)。本稿の見解では、「綜合的合一」では類似するものの「同質性」が獲得され、「綜合的抗争」では「異質性」が獲得される。つまり、類似して覆い合うものの間では、両者が同じものであるという意味と、異なるものであるという意味がせめぎあっている。以上のような覆い合いが固有領域において成立しているからこそ、触覚的経験でのせめぎあう二重感覚が可能となる⁷。すなわち、ルオが示した自己が他者の身体を物的身体と生きる身体の二側面をもつものとして経験できるという主張は、固有領域において二つのものが同質性と異質性のせめぎあいの中で類似性を形成することによって基礎づけられている。

これによって、二重感覚の成立根拠が覆い合いにあることが明らかになった。それでは、この覆い合いは、固有領域での他者経験にいかなる意義をもっているのだろうか。換言すると、この覆い合いは、固有領域で自己と他者が物的身体と生きる身体の二側面をもつものとして類似性を獲得することにどのように寄与しているのだろうか。本論を締めるにあたってこの問いに答えよう。

フッサールは、受動的な覆い合いを他者の身体把握の場面に適用する。彼によれば「私の原初的領域 [=固有領域] に一つの物体が際立って現れ、それが私の身体と類似している」ならば、「その物体は意味が押しつぶせられることによって、直ちに私の身体から身体という意味を受け取る」 (I, 143)。この「意味の押しつぶせ」をフッサールは「意味の移入 (Sinnesübertragung)」とも呼ぶ (I, 142)。この働きによって、受動的に対をなした自己の身体から他者へと「生きる身体」という意味が移入され、他者の身体が構成される。一般的な解釈では、以上によって他者の身体が物的身体と生きる身体の二側面をもったものとして構成される。しかし、先ほど明らかになった覆い合いの働きを踏まえると、ここに新たな解釈の余地が生じるように思われる。すなわち、受動的な覆い合いでの同質化によって、自

---

⁷ ここで、受動的な層での覆い合いが誰にとつての事態なのかという問いが生じるように思われる。換言すると、受動的綜合の次元で働いている自我は、いかなる自我なのかという問題が生じる。さらに、この問題は、自我と他我がいかにして区別されるのかという発生的現象学での問いにも関係する。しかし、本稿の目的は、あくまでも自己と他者の類似がいかにして成り立つのかという点に範囲を限定しているために、この問題には立ち入らず今後の課題としたい。

己が他者へ意味を移入し、他者を自己と同質的なもの（物的身体と生きる身体の二側面をもつもの）として理解しようとする働きが生じる。だが同時に、自他の間では、覆い合いの異質化によって、自己と他者の差異が異質性として際立ってくる。ここで自己に対して、他者は、同じものであると同時に、異なったものでもあるという一見すると矛盾した仕方で与えられることになる。だが、厳密に考えると、これは矛盾した事態ではない。というのも、二つのものが類似しているという事態は、そもそも異なる二つのものが部分的に同じ性質をもって結びつくことだからである。つまり、何かと何か似ているというためには、そもそも何かと何か別のものであるということがあらかじめ理解されていなければならない。そして、これは、自他の類似においても同様であろう。すなわち、固有領域で自他の身体が二重の仕方で与えられるとしても、それは完全に同じ仕方で与えられるわけではない。もし完全に同じ仕方で与えられるとすると、フッサールがいうように「彼〔他者〕自身と私自身とは同じもの」になってしまう（I, 139）。以上のように、覆い合いを踏まえて考察すると、意味の移入とは、同質性と異質性という二側面をもったものとして「原本的には到達し得ない」他者が「確証可能な到達できるもの」となる働きであることがわかる（I, 144）。

以上の解明によって、ルオの解釈で意義をもつ二重感覚の成立が、固有領域での覆い合いによって基礎づけられていることが明らかになるとともに、他者が自己にとって同質性と異質性を備えたものとして経験されることが示された。

おわりに

本稿の結論として、これまでの成果をまとめておこう。第1節では、感情移入論への批判が自己と他者の身体的類似性が成立し得ないという点にあることが示された。それによれば、身体的類似性への批判は、第一に、自己と他者の物的身体の出が異なることによって類似が成立し得ないこと（物体性批判）、第二に、自己と他者の物的身体が類似したとしても他者の生きる身体へは到達できないこと（身体性批判）の二つにまとめられる。第2節では、これらの批判に応答するためにルオの解釈を手がかりにし、触覚的経験を強調することによって、他者の生きる身体がある種直接的に捉えられうるということが明らかにされた。その際にルオは、握手という触覚的経験を特権的な例として扱っていた。しかし、こうしたルオの解釈には、超越論的次元での議論を考慮していないという制限があった。それゆえ、第3節では、この制限を克服するために、受動的な層で生じている覆い合いの検討を通じて、ルオが示した二重感覚の成立根拠を明らかにした。以上の解明によって、他者が自己にとって同質性と異質性を備えたものとして経験されるための基礎が覆い合いとして提示できることが明らかになった。

参考文献

フッサール全集 (Husserliana:Edmund Husserl Gesammelte Werke)

Bd. I : *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*, hrsg. von S. Strasser, 1950, 2. Aufl., 1963.
Cartesianische Meditationen. Philosophische Bibliothek Bd.291, hrsg. von E. Ströker, 1977.
(『デカルト的省察』、浜渦辰二訳、岩波書店、2001年。)

Bd.XI : *Analysen zur passiven Synthesis, Aus Vorlesungs- und Forschungsmanuskripten*, hrsg. Von M. Fleischer, 1966. (『受動的綜合の分析』、山口一郎・田村京子訳、国文社、1997年。)

Held, K. (1972) „Das Problem der Intersubjektivität und die Idee einer phänomenologischen Transzendentalphilosophie“, *Perspektiven transzendentalphänomenologischer Forschung*, Den Haag, Martinus Nijhoff, 3-60.

Kozłowski, R. (1991) *Die Aporien der Intersubjektivität: eine Auseinandersetzung mit Edmund Husserls Intersubjektivitätstheorie*, Würzburg, Königshausen & Neumann.

Luo, Z. (2017) “Motivating Empathy: The Problem of Bodily Similarity in Husserl's Theory of Empathy”, *Husserl Studies* 33, 45-61.

Schutz, A. (1975) “The problem of transcendental intersubjectivity in Husserl”, *Collected paper III: Studies in phenomenological Philosophy*, The Hague, Martinus Nijhoff.

Smith, A. D. (2003) *Routledge philosophy guidebook to Husserl and the Cartesian Meditations*, London and New York, Routledge.

Theunissen, M. (1977) *Der Andere. Studien zur Sozialontologie der Gegenwart*, Berlin, de Gruyter.

(千葉大学大学院人文公共学府博士後期課程)